

**月例会ダイジェスト 【72】**

東日本大震災から10年の2021年3月11日、今回のさんぽ会が開催された。テーマは「新型コロナとBCP(事業継続計画)」。当たり前の暮らしが打ち砕かれた“あの日”からの日々を振り返り、新たに直面するコロナ禍に企業はどう対応しているかを話し合う機会となった。コーディネーターは海野賀央氏((株)CSIソリューションズ)、金森悟氏(帝京大学大学院)、坂本宣明氏(ヘルスデザイン(株))、匂坂仁氏(すかいらーくグループ健康組合)、高家望氏((株)東急スポーツオアシス)、土屋智美氏(ジェイアールグループ健康保険組合)、福田洋氏(順天堂大学大学院)、安倉沙織氏(アビームコンサルティング(株))の8名。

今回は土屋氏、海野氏、匂坂氏、峯彰宏氏((株)日建設計)の4名が、運輸、IT(情報技術)、飲食・外食、建築・設計各業界のそれぞれの立場から、新型コロナへの事業継続のための取組みや事例を紹介した。

土屋氏は、コロナの影響でJRグループ内の受診抑制が進み、昨年5月に前年比約7割程度に低下。9～10月には例年並みに回復したが、再度の感染拡大で12月以降、同約9割に落ち込んでいる現況を説明。医療職の課題では、「感染対策のため、健康診断時の保健師による健康相談・面談が行いにくく、結果の説明だけになっている」とした。ただ、「対面が当たり前だったのが、コロナをきっかけにICT(情報通信技術)での面談が進んだのは大きな一歩」と振り返った。考察として、「駅や窓口等で感染対策が徹底されるべきだが、医療職が個人のプライベートを含む部分までタッチするのは難しく、その場の状況に応じにくい賢く生活していけるか。ヘルスリテラシーが大切」と語った。

海野氏は、BCPで一般的に想定されるリスクとして、自然災害、感染症、サイバー攻撃、軍事的有事、テロを列举。「自然災害特に地震は突発的かつ瞬間的だが、今回の感染症は瞬間的対応が必ずしも必須ではなく、致死率は高くはないようなので、想定外のことが起きても日々考えながら対応してきた」と述べた。BCPに共通する対策・対応として、①本社機能・各事業所の代替拠点の準備、②安否確認の方法の確立、③訓練や研修を通じた教育、④サプライチェーンの寸断による代替・対応手段の確立、⑤システム障害からの復旧、を挙げ、このうち、②③は人事が中心となって備える必要があると話した。その人事の役割として、危機対応に関する訓練・研修の企画運営、安否訓練、BCP文書の策定、災害対策本部の立ち上げ、緊急発令・感染症緊急事態への対応等を例示。「自社のみでなく、社会的インフラを担う顧客企業を守っていくこともIT企業の使命」と強調した。

匂坂氏は、「当社はコロナの影響をまともに受け、4月にはイトインが前年比約2割まで売上落ちた。持ち帰り宅配事業でやや持ち直し、今の総売上は前年比6～8割の状況」とした。飲食店は従業員と共にお客様の身を守る対策が求められ、店舗で手指消毒、検温、マスク配布等を行っているとした。危機管理の対応として、全国約3,100店舗のうち100店舗以上営業休止が想定される場合はBCPが発動。東日本大震災時は、発生後1週間以内で327店舗が営業できなくなった。だが、「飲食に携わる企業は食で被災地の皆様に恩返しするしかない」と、被災直後では首都圏を含めた店舗で帰宅困難者におにぎり等を支援、また、気仙沼と女川では炊き出し支援を7月まで実施。「非日常の先に『安心・安全・豊かさ』があると再確認した。これこそBCP対策の根本」と指摘した。

峯氏は、「2008年に新型インフルエンザ対策で自社のBCPを策定し、今回のコロナ禍でもそれを使用したため、あまり大きな混乱はなかった」と説明。BCPでは、行動規範としてマスク着用、手洗いのほか、出社前の健康状態のチェック、出張規制や帰国命令、通勤混雑回避、リモートワーク指示などが示されたという。今回は早期から出社比率を下げ、在宅勤務の推奨が図られた。大きな監視現場では施工者、職人など千人も関わるので、今後は顧客、従業員の安心のためにPCR検査の拡充を進めていく方針。「裁量労働制とリモートワークで会社の帰属意識が薄れるので、新しいオフィスの整備を提案していきたい」と語った。

続いてディスカッションを行った。「産業保健スタッフの関わりで良かったことはあったか」との質問に、海野氏が「医療の情報源にたどり着くのは素人の人事・労務担当には時間がかかる。医療の専門的素養をもつ産業保健スタッフに聞くと種々の確からしいエビデンスを教わったのが助かった」と回答。「『お客様の健康のために』という従業員マインドはどう浸透させたか」との質問者からの問いに、匂坂氏は「コロナ禍以前に正社員にスマートフォン、店舗にタブレット端末を配り、会社のメッセージを受け取れる環境は整った。加えて、新メニューの作り方などは短い動画を多く作りBYOD(自分のデバイスを社内に持ち込み、業務に活用する仕組み)で好きな時間に見られるようにし、結果的に当社の思想の徹底につながった」と答えた。10年前に高家氏と共に被災地を訪れた福田氏は「津波の中で産業保健は何の役に立つのかと自分たちの仕事の価値がなくなったような気もしたが、被災企業等を巡る中で普段の仕事をきちんとこなすことが一番大事だと心が落ち着いた。震災やコロナなど想定外の事態が起き本当に困った時に、さんぽ会のような多職種が集まる場で相談し合うことが大事」との感想で全体をまとめた。

さんぽ会の詳細は下記サイトをご覧ください。

- ホームページ <http://sanpokai.umin.jp>
- FBページ <http://www.facebook.com/sanpokai>